

アルヘンティーナ Argentina

特集 アルゼンチンの危機

No. 35

社団法人 日本アルゼンチン協会 会報

2002年1月

私の見た混乱	2	渡邊大使の分析	5
アルゼンチンの問題	3	隨想 篠沢恭助	8
政治腐敗が一番の原因	4	アンデスのカーニバル	11

新年ごあいさつ

日本アルゼンチン協会会長 斎藤 英四郎

あけまして おめでとうございます。

いま、アルゼンチンは未曾有の政治、経済的な苦境に陥っています。かつて日本が苦境にあったときにはアルゼンチンは、数々の支援をしてくれました。1905年、日露戦争のときに2隻の軍艦を譲ってくれました。太平洋戦争のときには、開戦から終戦の数ヶ月前まで中立を守りました。1950年、わが国が飢餓状態のとき食料、衣料を運んでくれました。遙かな友が苦しんでいる、こういうときこそ私どもはアルゼンチンを応援し、復活を見守りたいと思います。

今年のワールド・カップには、1996年2月に他国に先がけて「日本開催」支持を公表してくれたアルゼンチンのチームが来日します。日本チームに加え、優勝候補といわれている彼等も応援しようではありませんか。

今年もみなさまのご多幸をお祈りし、協会活動に一層のご協力をお願ひいたします。

外務大臣 田中 真紀子



年頭にあたり、日本アルゼンチン協会の皆様に御挨拶申しあげます。

私は、昨年4月に外務大臣を拝命し、初めてお迎えした外国の外務大臣がアルゼンチンのジャバリニ外務大臣でしたが、常日頃からアルゼンチンには親しみを感じ、高い関心も持っています。

御承知の通り、目下、アルゼンチンは経済的困難に直面していますが、このような時であるからこそ、私たちは相互理解のための地道な交流と対話を更に強化していかなければならないと考えます。その意味で、皆様の果たしておられる役割は重要であり、今後とも両国友好関係のために御協力をお願いする次第です。

末筆ながら、2002年における皆様の御発展と御多幸をお祈り申しあげます。

特集 アルゼンチンの危機

アルゼンチンの危機と言われて飛び上る人はいない。
それは寄せては返す波のようなものだ。

繰り返す政治・経済危機。しかし、どうにかなるのだ。
煩わしさは暫くかたわらにやってタンゴの調べとワインの香り。そしてそのまま悠久に時が流れて行く。

目前の為替や税制をどうするとかというだけの問題ではないだろう。この社会は、自分さえよければの哲学を長い間持ち過ぎた。社会全体をどう調和させるのか、富の配分はどうするのか、われがちではなく、順当な社会

を構築する、そのためには自分も痛みを負担する。その根源を認識しなければ、小手先の経済政策を何回ひねくり回してもどうにもならないのだ。下積みの大勢の優れた人材がいつまでも波にもて遊ばされたままなのだ。

各方面からの報告をお送りする。アルゼンチン情勢を深く読む手がかりとして頂きたい。

今の日本にとって、アルゼンチンの経済危機は人ごとは言えないからである。

編集長

私は見た 騒乱のブエノスアイレス

- ホテルの部屋に銃声が -

山下美里

12月21日、6年振りにブエノスアイレスのエセイサ空港に降り立った。快晴だったが、とても蒸し暑かった。今年の夏は特に湿度が高いという。アルゼンチンは4回目である。

前の日まで滞在していたマイアミのスペイン語のテレビニュースは騒乱の様子を生々しく映し出していた。30人近い人が亡くなっている。この状況でアルゼンチンに行っていいものかどうか夫と額を寄せ合った。

ブエノスアイレスの知人に電話した。「きのうは家から出なかたし、テレビも見なかつたので、何も知りませんでした。今日新聞で知ってびっくりしましたが、近くのスーパーもいつもどおり開いています。街も普段どおりです。騒動は大統領反対派が貧民を買収してやらせたという噂です。大丈夫です。安心していらして下さい」この言葉で決心がついた。

エセイサ空港は厳戒態勢を敷くわけでもなく、いつも通りのんびりしていて、拍子抜けしてしまった。

今回のホテルは、オベリスコから1ブロックで、コロン劇場に近く、フロリダ通りにも歩いて行けるという抜群のロケーションのところだ。

先ずフロントで状況を訊く。騒動はきのうまでのことで、大統領も代わった。非常事態宣言も解除された。今日は落ち着いている。もう大丈夫だという。だが、テレビを点けると、きのうの騒ぎの様子が生々しく流されている。居たたまれない気持ちになった。

テレビはそのままにして、フロントでもらったClarínとLa NacionのEspectaculos欄をチェックした。夜タンゴを聞くためである。そこに「RAUL LAVIE」の文字を見つけたときは彼の歌が生で聴ける嬉しさに思わず飛び上がってしまった。早速予約の電話をすると今夜の公演はこの騒ぎのために中止だという。翌日のマルコーニ、サルガン、デ・リオは予定どおりだというのでこれを予約した。

夕方のテレビニュースを見ると、オベリスコに終結したオートバイの若者と警官隊が激しく揉み合う様子が生中継されていた。私たちはテレビに釘付けになった。

突然、パーン、パーン、パーンという本物の銃声が窓の外から部屋に轟いた。同時にテレビ画面では警官が威嚇弾を撃っている映像が流れた。ゴム弾のようなものだったかもしれない。この時は本当に怖かった。

夜の10時を過ぎてしまった。空腹は限界に達していた。フロントは、「チュラスキートス」というコリエンテス通りのアサードの店を勧める。150席はありそうな広い店内に客は7~8組だった。欧米のマスコミの人たちだった。君たちも日本のマスコミかと尋ねる。こんな時間にこんなところで食事をしている日本人がよっぽど珍しかったのだろう。ワインを1本空け、生ハムとモロン(大きなピーマン)、アサード半人前、モジェハス(子牛の胸腺)を食べ、コーヒーで締めくくりすっかりいい気分になった。

このままホテルに帰るのはもったいないとオベリスコまで行ってみることにした。1ブロック半ほどの距離である。半ブロック先からは、ガラスが割られた銀行や店が何軒もあり、道路には粉々に割れたガラスが散乱していた。人通りは多くはなかったが、警官が要所要所で警備していたので、オベリスコを越えてもう少しコリエンテス通りを歩くことにした。マクドナルドの店が焼き討ちされ黒焦げになっている。丸1日経っているのに、物が燃えた後の臭いがはっきりとした。そのまま進むと、やはり1ブロック目まではガラスが割られていた。しかし、被害はオベリスコの周辺1ブロックだけで、それも銀行やアメリカ系資本の店だけなのだ。不思議なことにその他はどこにも破壊されたところはない。いつものたたずまいである。

左へ曲がってフロリダ通りに入つてみた。この通りにも破壊された店はなかった。もう夜中の12時近いというのに小さな子ども連れの姿もあった。キオスコは開いていたし、24時間営業の薬局も普段どおり営業していた。閉店準備はしていたがショッピングセンターのガレリア・パシフィコもまだ灯りがともっていたので、トイレを借りた。サンマルティン広場まで出たところで来た道を戻りホテルへ帰った。

とても長い1日だった。

(やました みさと、協会セクレタリア 12月21日から30日までブエノスアイレスに滞在)

アルゼンチンの問題点

菊地寛士

[破局の要因]

90年代、中進国から先進国に移行過程にある諸国中の最優等生と持て囃されたアルゼンチンが、カントリーリスクBP指数5000を超える最劣等生に急激に落ち込んだ背景にはいろいろな理由が挙げられるが、内的要因としては総額900億ドルに達する外貨建て国債起債収入の大半が政府の財政赤字の穴埋めに消費され、産業・工業技術改革等への投資に回らなかつた為に経済成長率に息切れが見え出したことである。外的要因としてはそのような状況を観察しながらアルゼンチンを甘やかしていたIMFが、ブッシュ政権誕生と共に態度を急変し、2000年末に合意に達した国際金融支援停止も辞さない態度に出たため、投機的資金の急激な回収・海外逃避が激発したことである。

[ドゥアルデ登場の背景]

アルゼンチンの大統領継承権法に従い、上下両院合同会議でペロニスタ主流派の領袖であるドゥアルデ上院議員（元ブエノスアイレス州知事）が、圧倒的多数票を得てデララアが残した任期2003年12月までを引き継ぐ大統領に選出されたが、これは必ずしもドゥアルデ支持基盤が広汎且つ強固であることを意味するものではない。ペロン党（PJ党）はブエノスアイレス州を本拠地とするドゥアルデ派以外に、メネム前大統領派、デラソタ・コルドバ州知事派、ペルタ前上院副議長を中心とする地方フェデラル派等7派ぐらゐの派閥が競い合っており、派閥同士の連合・分裂が政治局面の展開を流動的に左右している。今回の選挙で本命や対抗馬に擬せられていたルカウフ、デラソタ、レウテマン、キルチネル等の有力知事達が皆降り、ドゥアルデ一本に候補が絞られたのは、野党に回ったラジカル党主流派アルフォンシン派が、イデオロギー的に近似しているドゥアルデ擁立に固まつた為であった。最大野党ラジカル党がまとまってドゥアルデを推したので、70名近い自派代議士を握っているドゥアルデの優勢は決定的となった。

[新政権の行方]

上記経緯並びに組閣内容・政権の展開を見ると今回のドゥアルデ政権は、ドゥアルデとアルフォンシンの連立政権であることが明確であり、それがこの政権の脆さの象徴でもある。ドゥアルデは生粋のペロニスタとして本質的に階級闘争信奉者であり、社会主義者に近く且つ多分にファシスト的傾向をもつている。社会主義的イデオロギーを共有していることがアルフォンシンとの連立を可能にしているが、下層労働者階級を基盤とするブエノスアイレス州のペロニスタと中産階級を主力とするラジカル党とは感覚的に相容れないものが多い。一方、PJ党の地方勢力は中産階級・中小企業経営者等も深く取り込んでおり、イデオロ

ギー的にラジカル党アルフォンシン派とは肌合いが違う。そのため、ドゥアルデが、バランス上、内閣首班や有力閣僚に起用しようとした地方有力知事達は皆ドゥアルデ政権参加を拒否し、ドゥアルデはブエノスアイレス州知事時代の部下とアルフォンシンがOKするラジカル党員を中心として組閣を終了せざるを得なくなった。つまり、举国一致救国政権は名前だけで、実質的にはドゥアルデ派とアルフォンシン派の連立政権に過ぎず、とても残り2年は持たないであろうというのが大方の識者の今日現在の見方である。

ではアルゼンチンはこれからどうなるのであろうか？政治的にはドゥアルデ・アルフォンシンの連立政権はこれらの旧型政治家が生き残れるおそらく最後のチャンスであろうといえる。ドゥアルデ政権が政治システムの根本的改革に手をつけず、依然として財政赤字を引きずり、その付けを為替切り下げ操作等で国民に皺寄せする態度を改めない限り、「維持可能な経済再建策」を策定、IMFの合意を取り付け、中断されていた金融支援の再開を得ることは難しい。特に、対外債務支払い義務の履行を優先して経済再建に当たろうとしたカバロを見殺しにした以上、デフォルト宣言の上に立って更に財政赤字垂れ流しを前提とする政策を探るようなドゥアルデ支援はIMFとしても出来ないのである。2002年度の「実現可能な」財政赤字ゼロ予算の議会提出如何がこれからのアルゼンチンを占う大きな鍵といわれる所以である。

[核心は政治]

いずれにせよ、アルゼンチンの問題は経済問題ではなく政治問題である。デララア政権になってから急速に内外の信頼を喪失したのも政治的不安定要因が原因であった。アルゼンチンの対外債務総額は1,350億ドルである。このうち900億ドル余がドル建て国債でその6割以上がアルゼンチンの個人及び機関投資家の手中にある。一方、アルゼンチン国民の海外金融資産総額は1,000億ドルといわれる。国内の銀行に凍結されている国民の預金額600億ドルに、国民が政府を信用せず既に引き出して箪笥預金していると推察される分約400億ドルを含めると、亜国民全体の内外金融資産は優に2,600億ドルと対外債務額の約2倍に達する。これでアルゼンチンの問題は次元の低い政治問題に尽きると言う意味がご理解いただけたと思う。アルゼンチンの政界・労働界・産業界指導層が、法治国家として内外から信頼される政府を作りさえすれば、海外に自己防衛のため逃避している資金が投資機会を求めて里帰りすることは目に見えよう。いつ自国民に信用される政府を復元できるか（ドゥアルデには無理であろうが）、ドゥアルデ時代に底値になるだろうアルゼンチンの資産（不動産、農牧場、企業等）に投資しておくことも、中期的には面白い機会となるのではなかろうか。

（きくち かんじ、在ブエノスアイレス、エキパルコン社長、元在ア大使館書記官）

政治の腐敗が一番の原因

高木一臣

「この国をどう思うか」というアルゼンチン人の質問に対して「いい国だ」と答えると「そうだ。アルゼンチン人がいなければねえ」という答が返ってくる。アルゼンチン国民自身がアルゼンチン人を頭から信頼していないことを物語っている。

最近、「アルゼンチン人であることの誤り」と題する本がアルゼンチン人によって出版されたが、アルゼンチンに生まれたことをアルゼンチン人自身が誤りと思うようでは国がうまく行く筈はない。アルゼンチンの問題は、ここから始まっているように思える。問題が経済危機であろうと政治危機であろうと、それを越えた、それ以前の問題に基因していると言える。

その原因は、専門家の目から見ていろいろと挙げられるようだが、歴史的には、**<北米>**(アングロアメリカ)と**<南米>**(ラテンアメリカ)の出生の違いに求められる。前者が、信仰の自由を求めて母国を逃れ新天地を墳墓の地と定め開拓と生産に従事したのに対し、後者は、コンキスタドーレス(征服者)と呼ばれる一攫千金を夢見る冒険者が黄金を求めて略奪に終始したことである。つまり、定着精神と出稼ぎ根性の違いである。定着精神は、自分の住む場所と運命を共にする愛国心を生み出すが、出稼ぎ根性は、自分が稼ぎさえすればくあとは野となれ山となれで、愛国心は生まれない。その収奪精神が母国から独立した今となっても形を変えて続いているように思える。

アルゼンチンを含めてスペインから独立したラ米の諸共和国は、なるほどフランスの自由民権思想を政体の根本原則として採用、また北米合衆国憲法を模倣して憲法を制定し一応近代国家としての体裁は整えた。しかし、それによって植民地時代からの社会状態、特に人々の社会意識が変革されたとは思えない。例えば、被压迫階級であるインディオや黒人の社会的・経済的地位が実質的に改善された訳でなく、植民地時代からの積弊である官憲の腐敗が除去されたわけでもない。政治家や官吏の汚職は今に至るまでラ米諸国においては日常茶飯事となっているのである。ラ米では、**<独立>**は単なる母国との**<絶縁>**に過ぎず実質的な変革を伴わない。ラ米において**<政治家>**になるということ**<官職>**につくということは、**<富>**を築く手段に過ぎない。汚職が発覚して非難された政治家が、「公金横領や賄賂は無産者が財をなす唯一の方法である」とうそぶいているのを聞いたことがある。政治家を志す以上、愛国心や公益心は全くないとは言わないと、ラ米の政治家にとってそれは第二義的

なものでしかない。特権や地位を利用して財を蓄積するのが第一の目的なのである。従って、ラ米の名物と言わたく革命>もロシア革命や中国革命のような社会変革を追及するものではなく、「あいつらたんまり貯めただろうから、この辺で俺たちも…」というのが本来の目的なのである。

ラ米諸国では、大統領や大臣や議員を勤めたものがいかに高給を取るとはいって、給料だけではとてもできないような豪奢な生活を送っているのがそれを物語っている。**<上>**がそうだから**<下>**もそれに倣って汚職を身分相応にやってのける。汚職はラ米だけに特有のものではないが、悪いのは汚職が見逃される、ひどい場合、隠蔽されることである。発覚しても罰されたという話は聞いたことがない。一応、逮捕されるが証拠不十分ということで釈放されるのが常。マスコミも一時は騒ぎ立てるが司法当局の調査が2年も3年もかかるので、いつのまにかウヤムヤになって忘れられてしまう。精々、官職を辞任させられる位で、辞任しても在任中にタップリ稼いだ金で悠々生活して行ける。

兵器の不法売却とその売上金横領の疑いで逮捕拘留されていたメネム前大統領が、銀行預金凍結で海外旅行者は1000ドルしか持ち出しを許されていないのに、**<老いらくなれの恋女房>**セシリア・ボロッコと共に一泊4000ドルのメキシコの高級ホテルに宿泊、そこから政敵ドゥアルデ大統領の政策を攻撃、マスコミから「アルゼンチン国民の苦しみをよそに国外で豪遊とは」と批判された。司法当局の取調べに対して「海外に預金はない」と否定していたにもかかわらず、その金はどこから出るのか、全く語るに落ちるというやつである。

政治家だけではない。貧しい労働者を掩護すべき立場にある労組指導者たちも5000ドルから7000ドルという高給を取り家屋などの不動産を、ひそかに買いこんで蓄財に勤めている者が多い。国家に損害を与えるゼネストも自分たちの特権的地位を守るためにゴマカシに過ぎず、ダシに使われている労働者こそ哀れなものである。

「政治家は死して借金を残す」と言われた日本でも最近官吏の汚職が報じられているところを見ると、アルゼンチンの政治家や官吏たちばかり責めることはできないが、日本では汚職が発覚した場合、罰せられるからいいとして、アルゼンチンでは前述したように罰されないということが汚職をますます助長させることになっている。

泥棒は法の罰を受けるが、合法的泥棒は罰を受けない。合法的泥棒の例はちょっと新聞に目を通しただけでも枚挙に暇のないほどある。

・アルゼンチンが広大な領土と豊富な天然資源を抱え、ラ米第一の文化国と称せられるレベルにありながら、離陸できず遂に破産状態に陥ったのは**<泥棒天国>**である故ということを指摘したい。

「政治家がずるいからねえ」と泣き寝入りしていたアルゼンチン市民も漸くこのことに目覚めた。去年12月、デラルア大統領のあとをおそったペロン党のロドリゲス・サア大統領が、以前に汚職の疑いでブエノスアイレス市長の座を追われたカルロス・グロッソを官房長官に任命したのに対して、市民が“カセロラッソ”（鍋、釜を叩いての抗議）で即時辞任させ、延いては就任したばかりのサアを大統領の椅子から追った。今まで右翼から

も左翼からも、＜革命勢力＞となり得ないと見られていたプチブル中産階級が堪忍袋の緒を切ったものとして注目される。家庭の主婦たちの口から、「政治家を皆やつつけろ」という叫びが聞かれるようになったことは進歩とされる。

（たかぎ かずおみ、在ブエノスアイレス 「らぶらた報知」主幹）

渡邊駐アルゼンチン大使の分析

1月18日、中南米駐在各大使と経済団体の懇談会が東京で開かれた。席上、渡邊俊夫駐アルゼンチン大使は、現状を以下のように説明した。（要旨）

去年8月の赴任前、日本でいろいろな方から、アルゼンチン経済はもう持たないと聞かされたが、その通り進んでいる印象だ。12月以降の予想を上回る急激な展開は、現金引出し制限、海外への資金移動規制などの資本規制を始めたことから不満が高まり、また現金を稼げなくなった貧困階級の不満がクリスマスを前に爆発したのが一番大きい要素と思う。

この危機の原因として大きく4つの要因を挙げることができる。

1. 兌換制の行詰り

91年に導入された1ドル1ペソの固定レートは、流通量を外貨準備の範囲内に制限してきた。ハイパーインフレを抑えるためにはよかつたが、企業の民営化を進め外貨が入ってきた時財政が放漫に流れてしまった。現在そのツケがまわってきた。

2. 累積債務

1400億ドルの累積赤字はGNPの50%くらいに相当する。金利の負担がたいへん大きい。

3. 政治不安定が続いてきた。

4. IMFの厳しい態度

去年IMFの当局者が異動し、アメリカの政権も変わった。アルゼンチンに対する態度が厳しくなった。

現在一部の貿易は1ドル1.4ペソの固定制、その他は自由レートという二重相場になっており、この政策はIMFから批判されている。ドル化経済を調整する作業が行われているが、これによって得をする人はいない。損失をどのように分かち合うかということになる。

社会不安が起きると政権が持たなくなるので、社会不

安が起きないように妥協の道を探って行くことになるだろう。

当面の課題は、為替をどう調整するか、インフレをどの程度圧縮するかということだ。

実務的には、各州への地方交付金、連邦予算編成、IMFとの支援要請協議、債権者との交渉がある。債権のうち金額の大きいものは国債で、債権者の数が多いので、交渉はたいへんと思う。

これからどうなるかの見通しは難しい。これまで10年間は金融政策を発動できなかった。これから中央銀行総裁が政治からのプレッシャーに対してどこまでがんばれるかだ。政治的には、これ以上政治不安定になれば今度は大統領選挙しかないだろう。今のところ軍人が出てくる可能性は小さいと見ている。

アルゼンチンの経済危機の対外影響は、以前から予想されていたので、他国への波及は大きくなさそう。逆に言えば、その心配がないからIMFやアメリカが厳しい態度に出ているとも言える。一方、アルゼンチン国内では、開放経済に対する批判が高まっており、国内産業保護の主張が強まっている。その意味では近隣諸国に影響が出てくる可能性はある。

死者30人、900軒のスーパーが襲われるという状況で、中国人経営のスーパーも襲われたが、日系人の直接被害は全くない。しかし、日系企業も送金の停止などでビジネスができなくなっている。

アルゼンチンは日本でも国債を売ったので、一度現責任者のレニコフ経済相が日本に来て状況や政策を説明してくれることが望ましいと思う。

（文責 河崎）

ドキュメント

最新アルゼンチン情勢

政治・経済の主な出来事(1月21日現在)

小林 晋一郎

経済政策に反対した市民の抗議運動は多数の死者を出す惨事となり、責任をとって大統領が辞任、政治・経済の混乱が拡大した。2週間で5人の大統領が入れ代わる政治混乱が漸く収束に向かった。為替切下げ、対外債務支払い一時停止などクリスマスから新年にかけて新政権の政策が明らかになりました。

「上・下院選挙」

10月14日、上院72議席、下院257議席の内127議席を改選する選挙の結果、ペロン党が得票を伸ばし、上院24選挙区の内18選挙区で選出されるなど、ペロン党は上院・下院ともに第一党となった。上院でペロン党は39議席から41議席へ、下院では99議席から113議席となった。一方、連立与党は上院で22議席から25議席、下院で102議席から91議席となった。

「新経済政策」

11月1日、デ・ラ・ルア大統領は以下内容の新経済政策を発表した。

- 1 債務再編計画：既発債を新たに利回り7%以下の政府借入に交換する。これにより、金利支払い負担を40億ドル軽減する。
- 2 景気刺激策：消費拡大のため諸施策を導入する。
 - ・ クレディット・カードでの買物は付加価値税の税率を21%から16%へ引下げる。
 - ・ デビット・カードでの買物は付加価値税を21%から18%へ引下げる。
 - ・ 従業員の年金基金負担を1年間、11%から5%へ引下げる。
- 3 兑換制を維持する。

「部分的ドル化政策」

金融市场安定化のため政府は12月1日付け大統領令1570/01で以下のような部分的ドル化を定めた。

- 1 銀行の新規貸出は全てドル建てとする。既存貸出もドル建てとする。
- 2 ペソ預本金利の上限はドル預本金利の上限を超えないこととする。
- 3 貿易関連を除き対外送金は月間1000米ドルとする（その後、1万米ドルに増額された）。

「預金引出し制限」

政府は全国銀行預金の急減に対処し預金防衛のため12月1日付け大統領令1570/01で、銀行預金からの現金引出し制限を定め、月間1000ペソ（毎週250ペソ）を限度とし

た。これを超える分についてはクレディット・カード、デビット・カード、小切手を使用する。預金減少対策と脱税防止に役立つことが期待される。

「IMFの融資見送り」

IMFは12月5日、アルゼンチン向けの12月予定の融資12億6000万ドルは実行できる環境ないと発表した。アルゼンチン政府は2001年8月、IMFに対し財政赤字ゼロ政策の遂行、2001年財政赤字65億ペソを約束したが、財政赤字予想が78億ペソで目標達成が困難な状況となった。2002年についても、財政赤字ゼロを基本とする現実的な予算案成立の見込みが立っていない。

「国内債務の交換」

政府債務の金利負担軽減を目的に国内投資家の保有している国債と州政府の借入金を税収担保付きの低い金利の連邦政府・州政府の借入金とする債務交換が行われた。機関投資家と個人投資家を対象にあくまで任意の交換とした。国債420億ペソ、州政府借入金160億ペソ、合計580億ペソの交換が実現し年間35億ペソの金利支払い軽減となる。

「非常事態宣言」

緊縮政策に反対する市民の抗議運動は地方都市で始まり、一部では商店の略奪へと拡大していたが、12月にはブエノスアイレス首都圏に波及、当初はナベを叩き抗議する抗議デモであったが、19日には商店の略奪行為が発生、政府は期間30日間の非常事態宣言を発令、20日0時から実施した。この措置により憲法で保障されている権利が一時的に停止され、令状なしでの逮捕が認められ、集会が禁止された。市民の抗議デモで多数の死者が出る惨事となり、経済・社会混乱の責任からカバロ経済大臣の辞表が受理された。この騒動の背景には1999年からのマイナス経済成長、18.3%という高い失業率、8月から13%の公務員給与・年金の削減など国民は度重なる調整疲れの状況がある。

「大統領の辞任」

国内の経済・社会混乱を収束すべくデ・ラ・ルア大統領は野党ペロン党の支持取り付、連立政権樹立を模索したが、支持を得られず孤立、大統領は12月21日辞表を提出した。大統領欠員の際は、副大統領、上院議長の順で臨時大統領に就任する法律の規定に従い、ラモン・ペエルタ上院議長が臨時大統領に就任、両院議会を召集しデ・ラ・ルア大統領の辞表が受理された。

「暫定大統領の決定」

ラモン・ペエルタ臨時大統領が12月22日に召集し開催した両院議会は賛成169票、反対138票で以下を決議した。

- 1 サンルイス州の知事ロドリゲス・サア（ペロン党）を暫定大統領とする。
- 2 3月3日に大統領選挙を実施する。大統領就任は4月5日とする。
- 3 国民選挙で選出された大統領の任期はデ・ラ・ルア元大統領の任期末である2003年12月9日とする。

「債務不履行宣言」

12月23日に暫定大統領に就任したロドリゲス・サア大統領は就任演説で以下の主要政策を発表した。

- 1 対外債務の支払いを一時停止し、資金は社会費用に充当する。
- 2 兑換法を継続し、ペソの対米相場1米ドルを維持する。
- 3 省の再編を行う。経済省の廃止、大蔵庁・金融庁は大統領府の下に置く、外務省と国防省を合併するなど。
- 4 外貨準備の裏付けのない第3の通貨アルヘンティーナを発行し、現在流通している支払手段としての州債（ブエノスアイレス州のパタコンなど）や連邦政府のレコップと入れ替える。
- 5 100万人の雇用創出
- 6 最低賃金の引上げ
- 7 13%の公務員給与・年金削減の廃止。

「ロドリゲス・サア暫定大統領の辞任からドゥアルデ新大統領の就任まで」

政府に対する国民の抗議運動は沈静化せず、若者が国会建物に乱入、破壊活動を行うなど社会情勢は混乱が続き、ペロン党の有力知事らの支持取付けに失敗し党内で孤立、ロドリゲス・サア暫定大統領は12月30日、辞任した。法律に従い、上院議長のラモン・ペルタが臨時大統領に就

任することになるが上院議長を辞任したため下院議長のエドワルド・カマニョが臨時大統領に就任した。カマニョ臨時大統領は1月1日、両院議会を召集、元副大統領・元ブエノスアイレス州知事であったペロン党のエドワルド・ドゥアルデを賛成262票、反対21票、棄権18票で、任期をデ・ラ・ルア元大統領の任期である2003年12月として大統領に選出した。

「為替切下げと二重為替相場制」

ドゥアルデ新政権が議会に上程した「緊急事態・為替制度改正法」案が1月6日、両院を通過した。この法律で1991年から約11年続いたマクロ経済政策の根幹であった1ペソ=1米ドルの固定相場とペソの米ドルへの交換保証が廃止された。

為替制度を改正し、主として貿易決済のための公定市場とそれ以外の取引を対象とする自由市場の二重為替制度を導入した。公定相場は1米ドルに対し1.40ペソと定め、自由市場の相場は市場の需給で定められることとした。為替市場は12月21日から約3週間閉鎖されたが、1月11日ようやく再開された。

（こばやし しんいちろう、当協会理事、東京リサーチインターナショナル研究理事）

新駐日大使着任



アルベルト E. ハム新駐日大使が着任、12月10日皇居で信任状を奉呈した。ハム大使は、イスラエル大使、アイルランド大使などを歴任したキャリア外交官。

アルゼンチンが来る！ アルベルト・松本

W杯サッカーにアルゼンチンがくる。アルゼンチンは、1978年のアルゼンチン大会と86年のメキシコ大会で2回優勝、そのほかに準優勝2回。FIFAのランキングで前チャンピオンのフランスに次いで世界2位の実力チームであり、今度のW杯の優勝候補として大会を大いに盛り上げてくれるに違いない。

国内のキャンプ地として、福島県いわき市近くの楢葉

町のJ-Villageという日本サッカー界初のナショナルトレーニングセンターが決まっている。このスポーツ総合施設には、5千人収容のスタジアムを含めてサッカーフィールド12面、屋根付き練習場、宿泊施設等があり、マルセロ・ビエルサ監督も大変満足しているとブエノスアイレスの有力紙ラ・ナシオンは大きく取りあげている。

楢葉町と広野町がアルゼンチン代表チームのホストになるようで、現地では、チームが練習し、くつろげるよう様々な形で対策を整えているようだ。

F組のアルゼンチンは、予選では、まず6月2日にナイジェリアと、続いてイングランド、スウェーデンと対戦する。本国からは数千人のサポーターが来日するといわれている。W杯のために貯蓄や財産の一部を処分する者はいつものようにいるようである。ただ、経済情勢が悪化しているため当初言っていた約1万人の来日はかなり困難だと関係者は話している。それでも他の南米諸国のサポーターも含むとスペイン語圏だけでも1万人は下らないと推測されており、日本に住んでいる約3千人のアルゼンチン人たちを含むと心強い声援になると期待する。

日本アルゼンチン協会の会員の皆様にも是非アルゼンチン代表チームの応援をお願いしたい。チームの活躍が少しでもアルゼンチン国民の励ましになることを願う次第である。

（あるべると まつもと、当協会理事、イデアネットワーク代表取締役）

語る隨想 私とアルゼンチン

篠沢恭助

いやあたいへんなことになっていますね。アルゼンチンがもっと調子のよい時にこのコラムの場を与えて欲しかったですよ。

アルゼンチンは今、国際経済との関わりで苦労を背負い込んでしまいましたね。

1997年代に始まったアジア通貨危機がロシアを経由してブラジルまで波及した時ブラジルは通貨切り下げで対抗し、うまく経済を立ち直らせました。この時アルゼンチンは1ドル1ペソの健全経済を守ったのですが、今やブラジルの大きな経済力が圧倒的に有利な立場にたち、アルゼンチンは、一連の経済危機の最後のしわ寄せを受けている感じですよね。

一方でIMFなど国際経済界は、これはアルゼンチン自身の問題だとやや突き放しているように見えます。兌換制で超インフレを克服したのは立派だが、それを支えるための国内分配や税制も含めて自身でやるべき経済の基盤作りがちっとも進歩していない、と見ていく気がします。アルゼンチンが、自分たちはここまでがんばっているのだということをよく示さないと国際支援を円滑に取り付けるのはたいへんでしょうね。

私がアルゼンチンにいたのは、もう随分昔になりました。当時大蔵省からは、スペイン語圏に誰も行ていなかった。私もそれまでスペイン語には全く縁がなかったのですが、突然お前だと言われて青天の霹靂でした。アジア研究所で東畑精一先生に励まされて出かけました。ブエノスアイレス大学経済学部ではゼミ参加の許可ももらい、ア吉研のレポート作成業務と両立でした。

生活は快適でしたね。イリア文民政権のころで、インフレは少しずつ進む、為替は下がって行く、栄光のアルゼンチン経済が次第に弱さを表わし出したころです。肉なしデーが初めて導入されたりしていましたが、社会全体としてはかなりの先進性が残っており、往年の蓄積の上に立つ生活水準や文化度は、トータルとしては日本の及ばないものがあると思いました。



当協会理事、国際協力銀行総裁、元大蔵事務次官
1964年から66年までアジア経済研究所の在外研究員としてブエノスアイレスに駐在。『パンパの発展と停滞』の著書がある。

私どもの長女はアルゼンチン生まれです。出産のとき Hospital Aleman にお世話になりました。非常に医療レベルが高かったです。長女は、Patriciaというミドルネームを持っています。

在任中に藤沢嵐子さんが公演に見えました。私も行きました。たいへんな熱気でした。

コリエンテス通りのタンゲーラにもよく行きました。サッカーが好きで、Cancha de Riverへよく試合を見に行きました。東京オリンピックでアルゼンチンが日本に負けたときは、アルゼンチンの連中は本気で怒っていましたよ。「アマチュアの試合だからどうでもいいようなものだけれど、

日本に負けるとは何事だ」ってね。

よく国内旅行をしました。汽車やバスを乗り継いで、トゥクマン、 mendosa、ネウケン、コルドバ、ロサリオ、マルデルプラタなどの地方都市へ行きました。

アルゼンチンは、基本的には土地が広いこと、農牧の生産力があることが経済安定の基礎になっています。ブエノスアイレスは人口は多いのですが、ある意味では“道楽息子？”ですかね。それだけに地方には抜きがたい保守性が残っており、その地方がまたしっかりしていますから、それが市場原理に基づく競争原理の展開を阻げているところもあるように思います。

向こうで、大蔵省や中央銀行の若手官僚に随分親しくつき合ってもらいました。家にも呼んでもらったりいろいろ紹介してもらったりたいへん世話になったのですが、お返しできません。帰国後、予算編成などドメスティックな仕事ばかりだったこともあってafter careを怠りコンタクトが途切れてしまいました。今になってまことに残念に思っています。今、幸いにして、経済協力・金融支援の仕事に携わっていますから、この仕事を一生懸命やることが少しでも若い日の不義理へのお返しになるのかなと思って自分を慰めているのですが。

(聞き手 河崎 勲)

アルゼンチン人口3600万

～ブエノス人口は減少～

藤井正夫

11月の土曜日の夕方、ベルが鳴った。ドアを開けると若い女性が立っている。彼女は胸に「センサス2001」の証明書を付け、IDカードを提示した。国勢調査員だ。中に応じ入れると彼女はいった。

「入れて頂いてありがとうございます。身分を証明しても入れてくれない人も多くて……」

昔と違って今は調査員もたいへんだ。なにしろアルゼンチンは史上最悪の不況に見舞われ、失業率は16.4%。不完全就業者を加えると定職を持たない人は軽く30%を超える。犯罪は増加の一途をたどり、ブエノスアイレス市では40%の市民が強盗や盜難の被害にあって。これでは国が選定した国勢調査員といえども家の中に入れたくなくなるのも仕方がない。それでもアパート住まいの私どもは管理人が事前に身分を確かめているから、まだ安心できた。

調査員は小学校の先生だった。椅子を勧めると彼女はホッとした。

「本当に助かります。戸口に立ったまま答えを書き込むのも辛かった。それでも郊外の住宅地を回っている仲間に比べれば楽なものです。あちこち歩き回らなければならない上、一軒家の住民はなかなか家に入ってくれませんから……」

この国勢調査は、最初の予定では2000年の世界人口センサスに合わせておととし実施されるはずだったが、国家財政の悪化で繰り延べされた。だが、経済危機はさらに深刻となり、最後まで実施できるか危ぶまれていた。ことに実施予定のわずか10日前に給料遅配や低賃金に不満を持つ教職員組合が協力を拒否したことで危殆に瀕した。なにしろ調査員は中小学校の先生が大部分を占めるのだ。政府は急遽、公務員や軍隊からボランティアを募ったが、それだけでは48万人の調査員をカバーしきれない。だが調査員には市街地で45ドル、遠隔地では50ドルの日当が出る。安月給で生活の苦しい先生たちにとりこの日当は魅力だった。そこで教員の大半が組合の勧告を無視して調査に参加し、おかげでセンサス実施が可能となった。

こうして、国勢調査はなんとか実行できたが、調査員の中には、番犬に噛まれて入院したり、強盗に合ってみぐるみはがれたり、ホモに誘惑されたり、セクハラにあったり…… 調査員の仕事も楽じゃない。

電気のない田舎の家で「冷蔵庫はあるか、テレビやビデオは持っているか」と聞き「ばかにするな！」と追い出された調査員もいる。アンデスの山奥やパタゴニアの僻地などでは、調査員が前日の夜明け前に馬で出かけ、途中で民宿しながら何十キロも離れて散在する家々を回らなければならないのだ。

今回から先住民の出身部族の実態調査が追加されたが、その調査項目が先住民グループからの非難的になつたことはいうまでもない。「われわれはレッテルを張られる覚えはない。皆と同じアルゼンチン人だ」と回答を拒否した人も多かった。

一週間後、最初の人口集計がでた。まだ確定した数字ではないが、総人口は3602万7041人である。前回の1991年は3261万5528人だった。10年間の増加率は予想を下回り、10.5パーセントにとどまっている。アルゼンチンは昔から人口増加率の低い国だが、ことに近年の不況続いていることなども影響しているようだ。

首都ブエノスアイレス市は10年前、296万5000人であったのが、今回は273万人に減少した。治安の悪化、住宅費の高騰などが市からの人口の流出を招いているようである。

(ふじい まさお、ジャーナリスト、在ブエノスアイレス)

美しい歯あなたをより美しく
審美歯科 デンタル・エステ
六本木しみず歯科

家族的な相談から始めます 協会員優遇

院長 清水百合 Tel: 03-3408-8779

六本木駅2番出口徒歩1分 金子ビル4F

清水百合アルゼンチンタンゴアルバム発売記念ライブ
2月23日（土）新宿ミノトール2
<http://6simizusika.hoops.livedoor.com/>

ボルヘスと共に感の テーマ

～星野美智子リトグラフ展～

銀座の一角の版画ギャラリー。訪れた人の目にボルヘスが館長であった旧国立図書館をモチーフにした“らせん階段”の絵が飛び込んでくる。

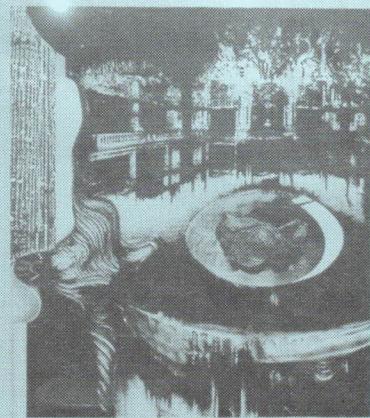
日本アルゼンチン協会の会員でもある星野美智子さんの個展が11月に開かれた。モノクロ・リトグラフ13点にディジタル技術を取り入れた作品を加え17点の新作版画が壁にかかっている。「ボルヘスの庭園」と「ボルヘスの失われた図書館」が今回のテーマであった。

「私の見せたい世界は、見えるものの描写ではないのです。見えない膨大な人間の思考の世界を、鏡に写すように描き出してみせたいのです」

東京芸術大学で油絵を学んでいたころから抽象画の世界に。26年前、評論文の中に引用されていたボルヘスの言葉にひらめくような共感を覚えた。

「こういうことを言いたいという方向が同じだったのです。私のそれ以前のテーマも、時間/空間/記憶の形式というものでした。価値観とメッセージでボルヘスと共に通するものを感じました。矛盾したものが同時に存在していることを認めるのです。ニューヨークの批評家に、“ロマン主義と象徴主義の傾向が作品に浸透している最も新しいシュールレアリスト”と言われましたが、自分ではドルーズのいわゆる “新バロック派” だと思っています」

その批評家コールマン氏は、去年10月星野さんがニューヨークで個展を開いた際に寄せた紹介批評の中



で、「星野美智子は、鍊金術師のような芸術家だ。本来表現力を持たないものを変容させることのできる創造者だ。この芸術家は、奥深く隠されていて表面からは見えないものを彼女だけが持つはっきりとした意志とビジョンで変容させる」(河崎訳)と述べている。「価値のないものを意味のあるものに創り出すという意味で、鍊金術師といわれるのはうれしいです」と、星野さんはこの批評を受け止めている。

1990年に文化庁から派遣されてニューヨーク、ブエノスアイレスに滞在。ブエノスアイレスでは、1991年以来マリア・コダマ=ボルヘス国際財団主催個展や国立版画美術館個展を開いており、フランスのトリエンナーレ、ポーランドのビエンナーレなど数々の国際展覧会に招待出品している。去年は、ニューヨークの国際ARTEXPO出展、ニューヨーク五番街や東京銀座の個展など。3年前ボルヘス生誕100周年の時は、中心になってボルヘス夫人マリア・コダマさんの日本招待を実現させ、これを端緒とした東京ボルヘス会発足の発起人でもある。日本版画協会、国画会会員。

(文 河崎 勲)

定款の改定 発効

2001年5月の協会総会で承認された定款改定が、同年9月7日所管官庁の外務大臣により認可され発効した。

改定点は以下の通り。

- ①定款に記載される協会事務所所在地を現在のオフィス所在地に変更した。
- ②会員資格
「長期間会費を納めない会員は総会で除名できる」旨の

規定が、「2年間会費を納めない会員は退会したものとみなす」という規定に改定された。

従って、2000年4月以降会費を納入していない会員は、今年の3月で退会扱いとなる。再入会には理事会の審査が必要となる。これは会計処理を透明化するための措置として上記総会で承認された。

③理事長、常務理事制度

理事のうち、協会業務を常時遂行している理事のうちから理事長、常務理事を選出することになっている。上記総会の決定に基づいて斎藤英四郎会長が10月に具体的に人事指名し、持ち回り理事会にかかっている。

フォルクローレの故郷のカーニバル

ガウチョのいでたちの男が次々と荒馬に挑む。馬は男を空中に跳ね上げ、まわりからどっと歓声がある。踊りがある。歌がある。酒がある。アンデス地方は今、夏祭りのシーズンである。長年にわたって何度もこの地を訪れているフォルクローレ研究家の宮下美和子さんに聞いた。

アンデスの夏祭りは、1月1日サンチャゴ・デ・エスティロ州の Festival Nacional de Chacarera で始る。コルドバ州コスキンでは1月の第3週から Festival Nacional de Folklore en Cosquin が開幕する。コルドバの Jesus Maria の荒馬乗りは、ドーマと呼ばれる。もともとは牧場の余興として始った。仕事の終わった週末のアサードのあと男たちがどれだけ長く荒馬にしがみついていられるかを競い合つたものだ。今は、ブラジルやウルグアイ、アメリカそしてスペインからも男どもが駆けつけてこのドーマで栄誉を競い合う。これを見ながらパジャドール(吟遊詩人)がギター片手に即興的に歌い上げるのだ。

実際、パジャドールは何でも歌にしてしまう芸術家だ。訪れてきた客人があいさつをすると、パジャドールが返す。“おお、とつ国より訪ねきたりしまろうどよ。そこもとを待ちわびたるうまし酒、今かめより現れ出でん”などという具合だ。フォルクローレの神様ユパンキもこういう吟遊詩人の経験を経て世に出たという。El japonés と呼ばれる日系3世のパジャドールもいる。普段は舞台などで歌い、このシーズンになるとあちこちの祭りに参加する。

夏祭りの中でも最大の祭りはカーニバルだ。アルゼンチン西北端のフイ州ウマウアカ。両側にそびえるアンデスの山肌が七色に映える。「あまりの美しさに嫉妬した太陽の神が山を抉り取って持つて行きウマウアカの渓谷ができた」『青銅の民』(藤井正夫氏)。その標高3500メートルの盆地のカーニバルはこうだ。

2月の金曜日。男たちが村のはずれで、馬の爪を投げて距離と角度を競うペタンというゲームを争う。ドーンとのろしが上がると、村の中心で待ち構えていた女たちが、トウモロコシの茎とあおいの木を掲げ持って一斉に走り出すのだ。男たちもの方へ走り出す。出合った男女はお互いに好きな人を掴まえてここで踊りが始る。踊りながらの行進になる。カーニバルの始まりだ。出会った人たちには、隠し持った穀物の白い粉を容赦なく浴びせかける。お互いが白い粉をかけ合って歓声と嬌声が村

中に広がるのだ。遠巻きに見物する観光客の頭の上から真夏の太陽がじりじり照りつける。

この地区に6つのコンバルサがある。踊りの“連”ともいうべきか。朝から夜まで6つの集団が、踊りながら行進し村じゅうを練り歩くのだ。男は、つばの広いフェルトの帽子、ポンチョ。女は長持の中から出したサテンの晴れ着をまとう。カッハという薄い太鼓を叩く。ケーナが鳴る。ボンゴが響く。ギターが弾む。歌いながら踊りながら顔一杯に笑いが広がっている。

行進の途中で立寄る家が毎年決まっている。土地の名家だ。コンバルサの連中は、多い時には100人にもなるし、何回も何回も立寄ってくる。しかし、どんなに多くても家に招じ入れ食べ物や酒を振舞う。それは名誉なのだ。ロクロという名のシチューのような料理がある。牛、とり、豚、羊の肉からモツまでを入れ、そこへジャガイモ、ニンジン、玉ねぎ、豆を加えてコトコト煮る。目に入るものは何でも入れ込む料理で、これがまたとてもおいしい。

もちろん酒は欠かせない。しかし、「ブエノスアイレスの連中が飲むようなあんな格好だけのビーノ(ワイン)が飲めるかってんだ。」ここの人たちは、落花生やトウモロコシで作る。口の中に入れてよく噛んでから甕の中に入れて行く。甕の中でゆっくり眠らせるとうまく発酵して素晴らしい酒ができる。chicha(チーチャ)という名のこの酒はドブロクと言ってよいだろう。

コンバルサの行進と踊りは、6日間続く。飲んでは踊り、踊っては行進し、吟遊詩人がそのまま即興で歌う。満天に星の降る夜まで踊っている。最後のころは、寝不足と酒でみんな目を真っ赤にしている。中には眠りながら行進する者も出てくる。

13日目の水曜日(Miercoles cenicero)。男たちはコルクの木を十字架の形に切り出し、焼いた灰を悪魔除けにひたいにこすりつける。各家庭から女たちが集ってくる。大きく掘った穴の中に噛んだコカの葉を吐き入れ、酒を注いで大地の神パチャママに感謝し、来るべき収穫のために祈りを捧げてやっとカーニバルが終わる。1年間の貯えをはたいて楽しんだ歌と踊りと酒とご馳走の感謝祭のあと人々はむさぼるように眠り、それから立ち上がって、再び土地を耕し収穫に汗を流す農耕の生活に戻つて行くのである。

(文 河崎 熊)

案内板

【】は当協会員特別割引

■タンゴ、新たな出発

エル・アランケとマリア・ホセ

恒例の民音によるアルゼンチンタンゴの全国公演

2月15日(金)八王子市民会館

2月20日(水)文京シビックホール

2月21日(木)中野サンプラザほか

問い合わせ: 民音 TEL(03-5362-3400)

後援: アルゼンチン大使館

■ヴァイオリンによるジャズとタンゴのコンサート

3月30日(土) 15:00~17:00 18:30~20:30

名古屋青少年センターートピア

主催: ソルーナ音楽事務所 TEL(052-799-1065)

後援: アルゼンチン大使館

■別府アルゲリッチ音楽祭

主催・連絡先: 別府アルゲリッチ音楽祭実行委員会事務局
(担当: 佐原秀治)

TEL(0977-27-2300)、FAX(0977-27-2301)、

E-mail: festival@fat.coara.or.jp

後援: アルゼンチン大使館

■清水百合アルゼンチンタンゴライブ

2月23日(土) OPEN 18:00、1部 19:00~ 2部 20:00~
ミノトール2 TEL(03-3341-2655)

4200円(ドリンク、税込み)

【協会員は本誌持参 10%引き】

申し込み TEL(090-3918-4576)

■小川紀美代(バンドネオン)ライブ

2月1日(金) 吉祥寺「マンダラ2」TEL(0422-42-1579)
吉祥寺南町2-8-9 JR 吉祥寺南口下車徒歩2分

19:30~、2500円~

2月3日(日) 鶴川「エアーズ・ロック・カフェ」

TEL(042-734-6661)

19:00~、2ステージ 1800円

2月8日(金) 南長崎「ユーラシアン」TEL(03-3951-7033)
大江戸線落合南長崎駅の上 ニッコービル2F

2月20日(水) 六本木「Nocher」TEL(03-3401-6801)
19:30~、3ステージ、2400円

2月27日(水) 横浜「ドルフィー」TEL(045-261-4542)
19:30~、2500円~

■アルゼンチンタンゴを踊ろう

スサーナ ユウコの“タンゴクラス六本木”

ロアビル裏 レーヌ六本木 地下1階 Chambers

TEL(03-5411-3197)

クラス 毎週水曜日 19:00~20:15

2000円(1ドリンク付き) フリーダンスタイルあり

ショー 第4水曜日 20:30、21:30、2回

ショー参加、プラス 1000円

問い合わせ TEL(045-461-6020) ユニバーサル D.A.

■アルゼンチン大使館ホームページ (日西両語)

www.embargentina.or.jp/omote.html

Enabajada Argentina en Japon

二国間情報、経済貿易、イベント情報、など

■日刊紙クラリンのホームページ

www.clarin.com

日々の動きを即刻。ラジオ、テレビも生で。

■日本で発行のスペイン語新聞(週刊)

International Press www.ipcdigital.com

問い合わせ先: TEL(03-3471-6989)

■本格的にスペイン語やラテンアメリカを学びたい方のために。

● 日本アルゼンチン協会主催スペイン語講座
問合せ TEL(03-3501-4684)

● 立教大学ラテンアメリカ講座
スペイン語、ラテンアメリカ論など、4月より新学期。
問い合わせ先: 立教大学ラテンアメリカ研究所
TEL&FAX(03-3985-2578)

■読書派の方々に、昨年出版されたアルゼンチン関係図書のご紹介

1. 「タンゴの歴史」石川浩司(当協会会員)
青土社 2001年6月 2400円

2. 「エビータの真実」アリシア・ドウジョンズ・オルティス
中央公論社 2001年6月 3800円

3. 「幻の帝国 南米イエズス会士の夢と挫折」伊藤滋子
同成社 2001年8月
(資料提供 櫻井敏浩様)
(社) ラテンアメリカ協会「ラテンアメリカ時報」2001年
10月号(3)、11月号(2)掲載

(福島)

広告欄を新設しました。申し込みは協会事務局へ。

日本アルゼンチン協会会報35号

2002年1月30日発行

発行人 野村秀治

編集長 河崎勲

発行所 社団法人 日本アルゼンチン協会
105-0004 東京都港区新橋1-17-1
新幸ビル

電話: 03-3501-4684

FAX: 03-3595-3932

Eメール: argentina@nifty.com

印刷所 株式会社 イデア・インスティテュート